

アスンシオン日本人学校における現地理解教育の実践

前アスンシオン日本人学校 教諭

愛知県新城市立東郷中学校 教諭 竹川 佳延

キーワード：総合的な学習、現地理解、日系社会、移住

1. はじめに

南米大陸のほぼ中央に位置する内陸国パラグアイ。亜熱帯気候であるが、一日の中に四季があるように感じられるほど気温の差が激しい。六月から八月までが冬。冬といっても三十度を超す日もあり、夏は四十度を超す気温が続く。一年を通して緑と色鮮やかな花があふれ、青い空のキャンパスがその鮮やかさを一層引き立てている。

首都アスンシオンは多くの日本車が走り、陽気なパラグアイ人で活気に満ちている。一方、地方に目を向けると、人々がテレレを飲みながらゆったりとした時間を楽しむ。またサッカーをこよなく愛するお国柄で、2010年のワールドカップでは試合が始まれば街中はテレビやラジオに釘づけになり、試合後は勝利を祝う花火、車のクラクション、一晩中余韻に浸っていた。

そして、2011年は独立200周年記念であった。独立記念日が制定されている5月には、パラグアイ中で盛大な式典が催された。

また、日本との関わりも強い。大きな日本人移住地が六つもあり、約七千人の日系人がこの国の様々な分野で活躍している。

2. アスンシオン日本人学校について

一畝の敷地の中に全面芝生の運動場、赤レンガ造りの校舎。校内にはラパーチョやハイビスカスの花が咲き、学校のトレードマークになっているハチドリが飛び交い、また季節になればポメロ（グレープフルーツ）やマンゴーの果実を子供たちと一緒にとって食べる。首都アスンシオンの中でもここは自然豊かな環境にある。

少人数の特性を生かしアットホームな雰囲気とユニークな活動で学んでいる児童生徒は私たちの自慢であり誇りである。

大きな日系企業はないが、児童生徒数は毎年15名前後で推移している。平成23年度の教職員数は校長・副校長の他に、派遣教員5名、現地採用教員1名、スクールバス運転手兼用務員1名の計9名である。子ども達は治安上、スクールバスによって登下校を行っている。

そんなパラグアイ日本人学校での現地理解教育について紹介する。

3. 南米そして、パラグアイを知る総合的な学習の時間

本校の特徴的な行事として、まず2つのことがあげられる。6月に行われる移動教室と9月に行われる「セマナデラアミスタ（友情週間）」である。これらの行事に向かって、児童生徒は総合的な学習の時間を使って、スペイン語の練習をしたり、調べ学習を行ったりしている。

(1) 移動教室（イグアス地方 エンカルナシオン地方 チャコ地方への宿泊学習）

毎年6月に、全校児童生徒による移動教室を行っている。行き先は3年周期になっており、パラグアイ東部のイグアス地方と、南部のエンカルナシオン地方、そして北西部のチャコ地方となっている。そこでは、日系移住者の

話を聞いたり、世界遺産である「イグアスの滝」や「トリニダー遺跡」を見たりする。

23年度は北西部のチャコ地方へ行った。チャコ地方は見渡す限りの草原で、人はあまり住んでいない。人よりも牛のほうが多いと言われている場所である。そんな中に、ドイツ人移住者が切り開いたフィラデルフィアという町がある。子ども達は、そこでドイツ人移住者が作る乳製品工場を見学したり、ドイツ系移住者のお年寄りと交流したりした。子ども達は、過酷な土地へ移住をしてきたお年寄り達の力強さと優しさにふれ、「移住とは何か」を考えるきっかけをもらったようであった。

私自身この移動教室で、ドイツ系移住者がいるフィラデルフィアや、日系移住者がいるイグアス移住地、ラパス移住地などをまわることができた。そこで知った移住者の考えや、祖国への思いは、大変貴重な経験となっている。

また、小学校1年生から中学生まで一緒に行動をするため、中学生はリーダーとしての行動を学び、低学年は集団行動の大切さを学ぶことができる。準備から当日の活動まで大変な労力であるが、毎年子ども達はとても満足した顔で移動教室から帰ってくる。

(2) 近隣の現地校との交流「La Semana de la Amistad」(友情週間)

学校からバスで10分ほどのところにある現地校「カンポベルデ校」と、毎年9月に2日間交流を行っている。初日はカンポベルデ校の児童生徒が本校の授業に参加をしたり、日本文化を体験したりする。その準備のために、子ども達は毎年、スペイン語を覚えたり、日本文化を調べたりする。

二日目は本校の児童生徒がカンポベルデ校の授業を体験する。スペイン語や英語の他に、現地の言葉である「グアラニー語」の学習も行う。

今年度で5年目となったこの交流により、カンポベルデ校に友達ができ児童生徒がたくさんいる。また、カンポベルデ校の教職員からは、日本人学校との交流により、日本人の姿勢や態度を学ばせることができると好評である。

また中学部は、交流のあとにも、日本とパラグアイの中学生の違いについて調べるために、カンポベルデ校に出向アンケートなどを行った。年に一度の交流であるが、子ども達も職員も親睦を深めている。

この交流から感じると、日本とパラグアイの違いや異文化とのふれ合いも、子ども達にとって非常に貴重な経験となっている。



現地校の生徒に習字を教える様子

4. 終わりに

パラグアイに赴任すると知ったとき、たくさんの不安が押し寄せてきた。しかしそんな不安も、こちらでの素晴らしい出会いによって、少しずつ消えていった。今ではパラグアイのアスンシオン日本人学校に赴任することができて、本当によかったと思っている。また、外から日本を見ることができた3年間でもあった。特に、ここで紹介した移動教室をきっかけに「移住」について興味を持ち、パラグアイにあるたくさんの移住地に出向いたことは、私にとってとても大きな経験となっている。そこで聞いた話や、そこで体験したことは、私のものの見方を大きく変えるものだった。そして、そこでの出会いは私にとって何ものにも代え難い、大きな財産となった。

この3年間で、海外のことについて多くのことを知り、同時に日本の素晴らしさをたくさん再発見した。これからの教員生活では、ここで経験したことや、感じたことを伝えていき、目の前の子ども達が、少しでも何かを感じてくれたらと思う。

パラグアイで出会った全ての人達、そして日本で私たちを支えてくれた全ての人達に感謝をし、これからも歩んでいきたい。